

2023 年度 人文学類卒業生アンケート結果について

人文学類 FD 委員会

人文学類 FD 委員会では、2023 年度に実施された卒業生アンケートの結果を公開いたしますとともに、問題点や課題を明らかにすることで、人文学類における今後の教育改善に向けて役立てていただきたいと思います。

アンケート実施時期： 2024 年 3月8日～25日

対象学生数： 人文学類 2023 年度卒業生 134人

回答者数： 72 名（回答率 52%）

2023 年度の人文学類卒業生アンケートの回収状況は、学類の学位記伝達式を実施した際に呼びかけを行い、また学位記伝達式前後の期間にオンラインで回答可能にして回答を呼びかけたことで、前年度よりは回収率を回復し、2 年前とほぼ同程度の回答率（54%）を得た。コース・分野で回答状況に違いがあるため、前年度同様に、学類単位での総計データに基づいて分析をおこなうこととしたい。

表 2023 年度卒業生アンケート結果

	1. そう思う	2. ややそう思う	3. あまりそう思わない	4. そう思わない	5. どちらとも言えない	高評価率 (1と2の合計)
Q1 幅広い教養や社会的常識を身につけることができた。	58.3	38.9	2.8	0.0	0.0	97.2
Q2 今後の活動に必要な専門知識や技術の基礎を身につけることができた。	43.1	51.4	4.2	1.4	0.0	94.5
Q3 自ら課題を発見し解決する能力を身につけることができた。	58.3	38.9	1.4	0.0	1.4	97.2
Q4 様々な状況に対応するコミュニケーション能力を磨くことができた。	48.6	44.4	4.2	2.8	0.0	93.0
Q5 プレゼンテーションの能力を磨くことができた。	38.9	45.8	12.5	2.8	0.0	84.7
Q6 異文化に関する理解力を高め、異なる視点から諸事象を把握する能力を身につけることができた。	38.9	50.0	9.7	0.0	1.4	88.9
Q7 人間や社会のあり方を論理的に理解する能力を身につけることができた。	47.2	51.4	1.4	0.0	0.0	98.6
Q8 人間や社会の諸問題を、歴史的背景をふまえて把握する能力を身につけることができた。	54.2	37.5	6.9	0.0	1.4	91.7
Q9 文献や文学作品の読解力を高め、ことばに対する感性を養うことができた。	47.2	43.1	6.9	1.4	1.4	90.3
Q10 全体として、金沢大学人文学類で学んだことに満足している。	83.3	16.7	0.0	0.0	-	100.0

2022 年度との比較を行うと、全般的に同様の傾向がみられ、高評価を維持していると言える。2022 年度と比較して回答者数が増大しているのを勘案すれば、全般的な高評価はより精度を増して、その傾向性を維持していると言えるだろう。

「Q10 全体として、金沢大学人文学類で学んだことに満足している」では、2019 年度 95.7%、2020 年度 90.2%、ともに 9 割を超え、2021 年度に 100%となり、2022 年度に続いて今年度もそれを維持した。一番高い「そう思う」でも 83.3%となっており、2022 年度を 10 ポイント以上上回った。コロナ禍が一段落し、平常の教育活動に徐々に戻り、学生生活の充実を学生たちが実感できたこともこのような評価に反映されているものと思われる。

高評価が 5 ポイント以上増加した項目は、Q7「人間や社会のあり方の論理的理解能力」(6.6 ポイント上昇)の 1 項目のみで昨年度の 3 項目を下回っているが、昨年度の段階で設問 10 項目のうち 8 項目が 90 ポイントを超えていたことを鑑みれば、大きな上積みは基本的に難しい構造になっており、そうした高いレベルが維持されたことをむしろ評価すべきであろう。

ちなみに「1.そう思う」に関して 5 ポイント以上増加した項目を挙げると、ポイント差の大きい順に、Q3 課題の発見・解決能力 (11.3 ポイント上昇)、Q2 専門的知識・技術の基礎習得 (同 11.1 ポイント)、Q8 諸問題の歴史的把握 (同 10.2 ポイント)、Q4 コミュニケーション能力 (同 6.6 ポイント) など 10 ポイント以上の顕著な伸びを示した項目が 3 つもあり、これらの項目では学生の満足度が相対的に上がっていると考えられる。

他方、高評価率が前年度と比較して大幅に低下した項目は認められなかったが、「1.そう思う」に限れば、Q6 異文化理解が 13.1 ポイントも減少し、Q9 の「文献・文学作品の読解力向上、ことばに対する感性の涵養」も 8.8 ポイントの低下を示しているのはいささか気がかりな点である。Q6 については、学生の専攻分野によってやや偏差があるのは否めまい。一方、Q9 については人文学類の学問全般に関わる問題であるという点において看過できない側面がある。卒業生に自由な意見を書き込むよう求めた Q11, Q12 では専門科目を英語で行うことに批判的な意見も散見されており、授業の過度な英語化よりも日本語での授業の充実を求める声が一定数あることは考慮されるべき問題のように思われる。また、Q5 プレゼンテーション能力も、かつてと比べればかなり評価が上がっているとはいえ、他の項目と比べれば相対的には低い位置にあるため、いっそうの向上の努力が求められるところであろう。

総じていえば、今年度の卒業生は人文学類の教育に満足していたと判定することができるだろう。次年度以降も、こうした高い評価が保たれるよう学類構成員各自の奮励・努力が引き続き求められるところである。